

# 松本市におけるカーネーション栽培地域の形成

仁平 尊明

キーワード：カーネーション，準高冷地，松本市，長野県

## 1 序論

経済の高度成長期以降，切花の需要が急増し，生産量が急激に増加した。花卉園芸はわが国の農業における拡大部門の一つとなり，各地に特色ある花卉産地が形成された。とくに，市場への近接性を活かした都市近郊と，温暖な気候条件を活かした西南地方で花卉産地が発展した（松井 1978）。

花卉産地は景観的に独特の特徴を持つことから，多くの地理学者の関心を集めてきた。なかでも松井貞雄は，渥美半島（松井 1967），伊豆半島（松井 1968），沖縄島（松井 1986）で，個々の農家の特色に焦点を当てた精力的な現地調査から，地域の特徴を花卉の施設園芸から説明することに努めた。太田（1981）は，花卉園芸農家の経営に他産地との競合の視点を加えて，福岡県八女市の電照ギク産地の形成過程を市場競争力の観点から説明した。また，伊藤（1989）は，東三河平野のスプレーギク産地の経営基盤を分析し，花卉園芸を高度に資本集約化した工業的農業として位置づけた。

これら温暖地域に比べて，高冷地の花卉産地を対象とした研究は少ない。斎藤（1991）は，やませの常襲地域である岩手県安代町のリンドウ栽培とりあげ，生産者・出荷組織・行政が一体となっ

て，自然条件を活かした花卉産地が形成された過程を述べている。また，農業生産の盛んな長野県においては，市川（1991）が上山田町，富士見町，松本市，佐久町においてカーネーションが盛んに生産されていることを報告しているが，その実態の詳細な調査には至っていない。

本研究は，松本市のカーネーション産地を事例として，個々の農家のカーネーション導入時期とその後の農業経営の変化に注目することから，高冷地における花卉産地の発展要因の一形態を明らかにしようとするものである。基礎資料は，1994年6月27日から7月1日に行なった現地調査から得たものとする。すなわち，農家への聞き取り調査，および南信ハウスカーネーション組合と松本ハイランド農業協同組合で収集した資料を主体とし，加えて，長野県農林業市町村別統計書，松本市農家基本台帳，および松本市営農台帳を活用した。

長野県におけるカーネーション栽培面積と出荷量は全国最大である。農林水産統計情報部（1993）によると，1991年現在，長野県のカーネーション栽培面積と出荷量は128haと1,408万本<sup>1)</sup>であった。長野県内におけるカーネーション栽培面積は，1992年現在，松本市が11haと広く，以下，富士見町が10ha，佐久町と上山田町が8haと続く（関東農政局長野統計事務所編

1993)．矢口(1992)によれば、近年の長野県における切花の栽培面積・出荷量は、カーネーション、トルコギキョウ、アルストロメリア、デルフィニュームが高い伸び率を示しているのに対し、キク、リンドウ、ユリが減少傾向にある。

松本市はフォッサマグナ西部の南北に延びる地溝盆地の南部に位置し、市域の複合扇状地上に耕域が広がる。松本市内では、西部の標高 590～650m の地域でカーネーション栽培が盛んであり、これは長野県農政部と長野県農業協同組合の定める準高冷地帯にほぼ当てはまる<sup>2)</sup>。準高冷地帯における夏季の気候特性、すなわち、低い夜温、少ない降水量、強い紫外線などは、水揚げの良く花色鮮やかな、良質なカーネーションを作るのに適するといわれる(長野県経済事業農業協同組合連合会 1976；市川 1992)。

松本市は大消費地・京浜地域と中京地域から 200km 圏内、また、京阪神地域から 300km 圏内に位置する輸送園芸地域といえる。出荷に要する時間は、京浜地域と中京地域が 4～6 時間、京阪神地域が 8～10 時間である。本州のほぼ中央に位置する松本市は、京浜から京阪神地域ま

で、大都市に立地する花卉卸売市場への出荷が可能である。

## II 松本市におけるカーネーション栽培

### II-1 カーネーション栽培農家の分布

松本市におけるすべてのカーネーション栽培農家は、松本ハイランド農業協同組合花卉部会(以下、農協花卉部会とする)に加入する。1994 年時点において、農協花卉部会は松本市、山形村、波田村、梓川村の農家 185 戸が加入している。松本市内では、農協花卉部会農家 132 戸のうち、カーネーション栽培農家が 51 戸と半数近くを占める。

カーネーション栽培農家の中には、農協花卉部会以外に、南信ハウスカーネーション組合(以下南信ハウス組合とする)にも加入する農家がある。南信ハウス組合は、カーネーション栽培農家によって運営されている任意組合で、その設立年は 1951 年である。農協花卉部会の設立年は 1978 年であるから、これよりも 20 年以上も長く続く部会である。1994 年現在、南進ハウス

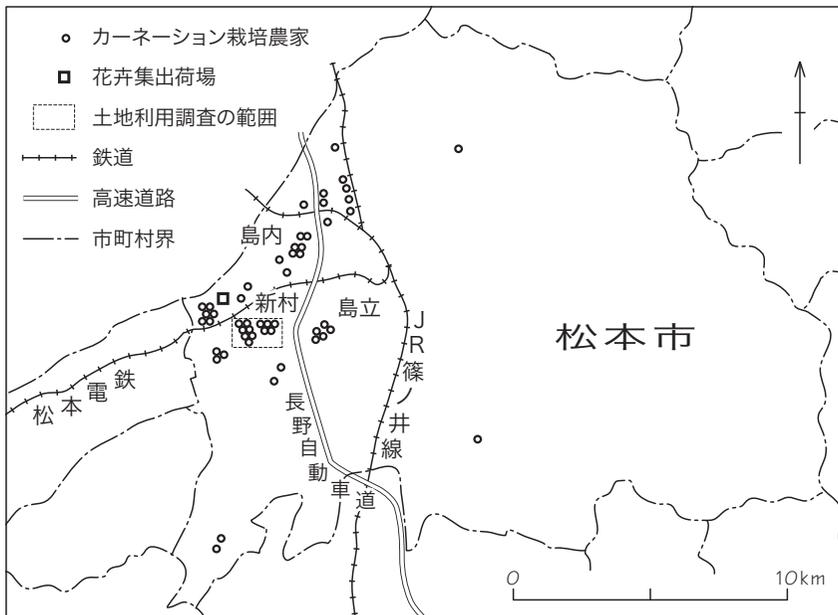


図1 松本市におけるカーネーション栽培農家の分布 (1994年)  
(松本ハイランド農業協同組合の資料より作成)

組合農家数は169戸で、その分布範囲は飯田、伊那、諏訪、松本の各市を中心とする26市町村である。松本市内で南信ハウス組合に加入する農家は44戸で、同市内のカーネーション栽培農家の大半を占める。これらの農家の多くは、農協花卉部会の設立前からカーネーションを栽培している。

松本市におけるカーネーション栽培農家の多くは、西部の新村、島内、島立の3地区（いづれも旧村）に分布する（図1）。とくに新村地区には、松本市内の約4割に相当する20戸のカーネーション栽培農家が集中する。そのなかで、農協花卉部会と南信ハウス組合に加入している農家は17戸ある。新村地区は松本市におけるカーネーション栽培の発祥地であり、現在でもその核心地域である。新村地区でカーネーションが栽培されている主な場所は、3か所に建設された花卉温室団地の鉄骨ガラスハウスの近辺である。

## II-2 新村地区の土地利用

ここで、2つの花卉温室団地が立地する新村地区の土地利用を検討する（図2）。新村地区の標高は605～620mの範囲にあり、その地形は西から東へ緩やかに傾斜し、起伏は少ない。水田と集落が形成される微高地との標高差は30～70cm程度である。農業集落は、東部の東新集落と西部の南新東集落に分けられる。土地利用は農地が卓越し、工業・商業用地は広い通りに面して数か所に見られるに過ぎない。

水田は圃場整備された規則的な地割りであり、そのほとんどで水稲が栽培されている。一部にはキャベツ、ナス、ニンジンなどの野菜類や、トウモロコシ、リンゴ、花木、植木などが栽培されている。カーネーションをはじめとする花卉類は、水田の中に建設された花卉温室団地<sup>3)</sup>と、その周辺のビニルハウスで栽培されている。

カーネーション栽培農家は、東新集落に5戸と南新東集落に7戸の合計12戸ある。そのなかでも花卉温室団地で栽培を行う農家は、東新集落に4戸と南新東集落に6戸の計10戸である。花

卉温室団地には大型の温風式の暖房設備があり、アルストロメリアやトルコギキョウなど多様な切花を周年的に栽培している。一方、その周囲に位置するビニルハウスは花卉温室団地と比較して小型の暖房機が設備されており、カーネーションに特化した花卉栽培が行われている。

松本市のカーネーションは、高冷地性の自然環境を活かして栽培されている。高冷地性の気候条件下では、母の日に向けた5月出荷の促成栽培は難しい。しかし、夏季に夜間が低温になるという自然条件を活かして、良質なカーネーションが夏から秋にかけて出荷されている。

平均的な規模の花卉温室団地（間口12m、奥行43～86m）では、カーネーションが床幅90～95cm、8列の間隔で植えられており、その間には60cm幅の通路が7列ある。カーネーションの種類は、摘蕾をして一輪咲きに仕立てるスタンダード系と、房咲き状に仕立てたスプレー系がある<sup>4)</sup>。スタンダード系とスプレー系の単位面積あたりの生産量の比率は約7対3であるが、近年では単価の高いスプレー系が高い伸び率を示している。スプレー系のカーネーションは、フラワーネットの1区画（11cm四方）に6本前後の茎が入るように仕立てられる。そして、5個の蕾のうち2個が開き始めた頃を目安にして摘花する。

## III カーネーションの生産基盤

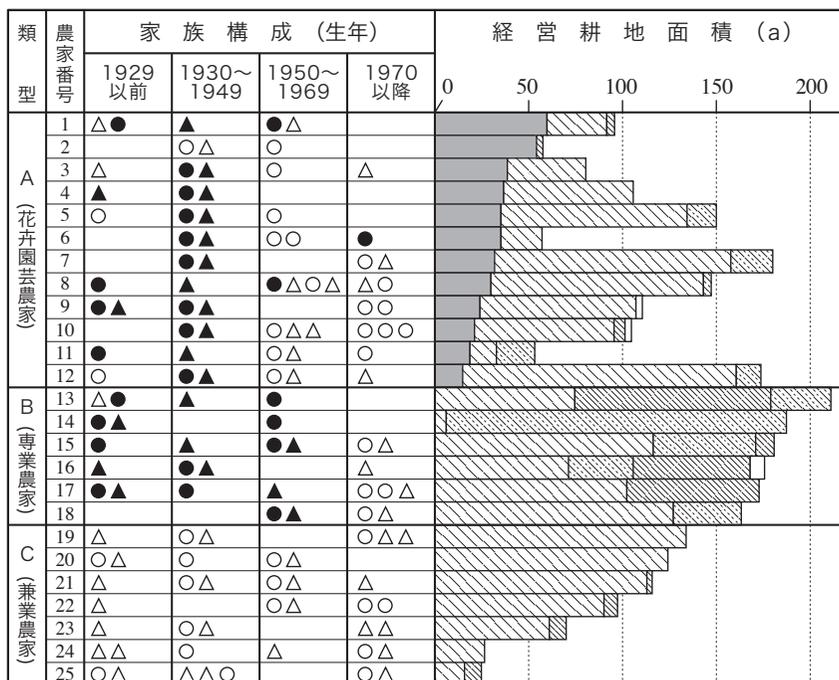
### III-1 労働力と耕地

図3は東新集落と南新東集落における農家の経営耕地面積<sup>5)</sup>と労働力構成を示したものである。ここでは、カーネーション栽培農家をA類型、花卉栽培以外の専業農家<sup>6)</sup>をB類型、兼業農家<sup>7)</sup>をC類型とする。

A類型のカーネーション栽培農家は東新集落5戸、南新東集落7戸の合計12戸である。経営耕地は切花と水稲の組み合わせがほとんどで、全体的には、花卉栽培面積の多い農家では水稲作面積が少なく、反対に、花卉栽培面積の少ない農家で



図2 新村地区の土地利用  
 (1994年6月28, 29日の現地調査より作成)



● 男(農業従事) ▲ 女(農業従事) ○ 男(非農業従事) △ 女(非農業従事)  
 ■ 花卉(施設) ▨ 水稻 ▩ 水稻以外の穀類 ▪ 露地野菜 ▫ 飼料作物 □ その他

図3 新村地区における農家の家族構成と経営耕地面積(1994年)  
 (農家基本台帳および営農台帳より作成)

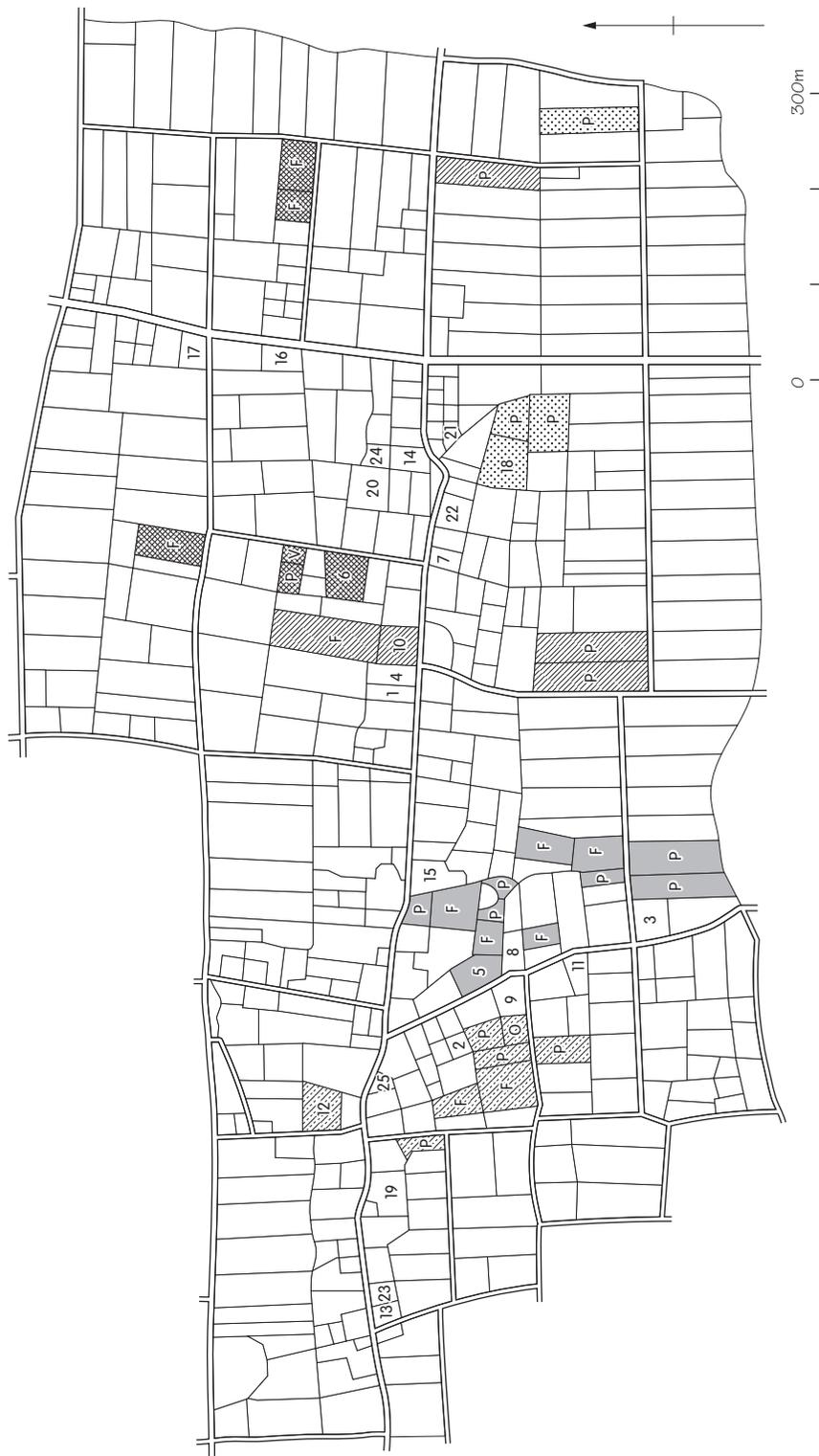
は水稻の面積が多くなる。また、花卉栽培面積の1戸あたり平均は32aで、農業労働力の1戸あたり平均は2.3人である。施設でのカーネーション栽培は、"20aの耕地で労働力2人"が適当であるとされるが、この地区のカーネーション栽培農家の平均はこれを超える値である。農業従事者の生年は1930~1949年が最も多く、全体的に高齢化が進行しているのが現状である。1965年以降に生まれた若い農業後継者がいるのは、現時点では農家番号6だけである。

B類型の專業農家は、東新集落4戸、南新東集落2戸の合計6戸である。経営耕地面積の1戸あたりの平均は182aと他の類型と比較して広く、水稻、野菜、トウモロコシなどの雑穀類、飼料作物などを多様に組み合わせている。例えば、飼料作物栽培面積が多い農家番号14は酪農家で、図2の範囲の北東部にある牛舎を経営している。農家番号13、16、17は野菜類の面積が大きい、これには新村地区南部の和田地区(旧

村)における出作的な耕作が多く含まれる<sup>8)</sup>。農業労働力は、1戸あたり平均が3.2人で、ほとんどの農家に2世代以上の農業従事者が存在し、後継者も充実している。

C類型の兼業農家は東新集落4戸、南新東集落3戸の合計7戸である。1戸あたりの経営耕地面積の平均は83aであり、3つの類型中で最も少ない。しかし、水稻の作付面積の平均は80aとA類型よりも多い。現在の水稻作は機械化が進んでいるため、高齢者や、週末・休日だけの農業に従事する農外就労者でも1ha程度の水田であれば十分に耕作可能である。

このように、新村地区は松本市街地での就業機会に恵まれているため、農家の兼業化が進んでいるのが現状である。そのなかでも専門的な農業経営を続けている農家のタイプには、広い経営耕地を持つものと、集約的な花卉栽培農家とがある。前者は、地区外部にも耕地を所有し、野菜やトウモロコシなどを多様に組み合わせている農家や、



- 農家番号5の耕地と宅地
  - ▨ 農家番号6の耕地と宅地
  - ▧ 農家番号10の耕地と宅地
  - ▩ 農家番号12の耕地と宅地
  - ▤ 農家番号18の耕地と宅地
  - ▦ 住地農家番号18の耕地と宅地
  - 花弁
  - 野菜類
  - 水稲
  - その他
- ※番号は図3の農家番号に対応する。

図4 新村地区における農家の所有耕地（1994年）  
（聞き取りより作成）

酪農家であり、農業後継者も充実している。一方、後者は比較的狭い経営耕地で、労働・資本集約的なカーネーション栽培を行う農家である。しかし、カーネーション栽培農家は、兼業化による農業後継者難や労働力の高齢化という問題を抱えているのが現状である。

### III—2 耕地の分布

図4は、カーネーション栽培農家4戸と専業農家1戸の耕地の分布を示したものである。農家番号5の耕地は、宅地周辺と区画整備された水田にある。宅地周辺の耕地は一筆の区画が狭く、地割りも複雑な形を呈している。ここでの花卉栽培は、2つの鉄骨ガラスハウスでのアルストロメリアやカラーなどで、多様で集約的な栽培を行っている。区画整備された水田では、水稲作の他、ビニルハウスでカーネーションを栽培している。また、図の範囲外（新村地区）に経営耕地の9%を占める14aの水稲作<sup>9)</sup>がある。この農家は、2つの集落内で最も早く、1957年にカーネーション栽培を導入した。それ以前は、露地ギクを栽培していた。

農家番号6も、集落内で比較的早い時代（1961年）からカーネーション栽培を始めた農家である。この農家の経営耕地面積は55aと少ないが、耕地に占める花卉栽培面積は62%と大きい。耕作地の分布は、東部の温室花卉モデル集団産地育成場（カーネーション）、花卉温室団地（アルストロメリア）、宅地周辺の水田と家庭菜園だけである。温室花卉モデル集団産地育成場は、1973年に育苗用として建設された鉄骨・ガラスハウスで、当初は共同育苗が行われていた。しかし、種苗会社からのカーネーション苗の購入量の増加によって、1980年代中頃から共同育苗は行われなくなり、現在ではこの農家が個人でカーネーションを栽培している。

農家番号10と12は、酪農からカーネーション栽培に転換した農家である。花卉栽培面積は比較的少ないが、水稲作の面積は多い。農家番号10は、鉄骨ガラスハウス（1,900m<sup>2</sup>）のアルス

トロメリアの他、宅地南側の約70aの水田で水稲を耕作している。農家番号12の耕地の分布は宅地周辺部だけでなく、経営耕地面積の46%にあたる79a（水田69a、野菜10a）は、和田地区などの集落外での耕作である。

カーネーション栽培農家と比較するため、専業農家（農家番号18）の事例を示す。この農家は水稲作農家であるが、水田は図の範囲の95aのほか、集落外に59a（経営耕地の38%）の耕作地がある。これらの耕地は、この農家の経営耕地の38%に相当する。集落外にも広い面積の経営耕地が分布することは、耕地面積の広いカーネーション生産農家と同じ傾向であるが、この農家の場合、農業従事者は1950年代生まれと若い。また、農業労働力一人あたりの経営耕地面積は81aと事例農家25戸中で最も大きい。

新村地区において、水田の区画整備が行われたのは、花卉温室団地の建設とほぼ同時期の1975～1976年である。農家の話し合いによる農地の交換分合は難航したが、土地の基盤整備が行われ、花卉温室団地が建設されると、水稲作農家と花卉専業農家ははっきりと分化していった。新村地区では集落外（和田地区など）への出作的耕作が多いが、これは新田開墾にともなって展開していった農地であり、基盤整備よりも前の時期のことであった<sup>10)</sup>。

### III—3 カーネーションの作型と出荷

松本市における一般的なカーネーションの栽培歴は、10月下旬にさし芽、12月中旬に仮植、3月中旬に定植、6月下旬から7月中旬までが1回目の採花、8月上旬から11月上旬まで2回目以降の採花となる。採花は多くて4回程度行われる。近年では、種苗会社からプラグ苗を購入し、それを施設に直定（直接定植）することによって4～5月の早期出荷も可能となった。

いわゆる仕事花と呼ばれるキクやカーネーションには、生花市場において高値で取り引きされる日<sup>11)</sup>が一年のうちに数日ある。農林水産省統計情報部（1994）によると、1992年現在、東京

の花弁市場でカーネーションの平均卸売り価格が最も高かったのは、母の日のある5月で94円であった。全国最大のカーネーション出荷量を誇る長野県では、この時期の出荷量は多くない。松本市におけるカーネーション出荷のピークは、スタンダード系が6月下旬～9月上旬で、スプレー系はやや遅れて7月上旬～下旬と8月下旬～9月中旬となる。1993年時点において、出荷ピーク時の松本市のカーネーションの市場における卸売り価格の平均は、一本あたりスタンダード系が47円、スプレー系が60円であった。

カーネーションの出荷は、生産農家が新村の花弁集出荷場へ持ち込むことによって行われる。出荷形態には、共選共販と個選共販がある。花弁市場から遠距離にある輸送園芸地域では、農家が直接花弁市場へ出荷すること（個選共販）は困難であるため、個選・共選での共同出荷は重要である。共選共販は、花弁集出荷場で荷をプールして、松本ハイランド農業協同組合のカーネーションとして市場へ出荷し、一方、個選共販は農家個人の名前で市場へ出荷する。共選共販でカーネーションを出荷する場合、農協職員が切花の品質検査を行うため、農家は出荷日<sup>12)</sup>の14時30分までに出荷を完了しなければならない<sup>13)</sup>。個選共販の場合では、カーネーションを含むすべての切花は、出荷日の16時までに花弁集出荷場へ出荷する。個選共販では、花弁集出荷場の一面に花弁市場の名前が書いてあり、農家はそこに荷を置くことによって出荷を行う（写真3）。この場合、出荷場は輸送ターミナルとしての機能を持つだけとなる。共選共販・個選共販ともに、最盛期の出荷日には家族外的女子労働力に依存する農家もある。

一般的に、輸送園芸地域は共選共販の出荷が多いが、松本市では個選共販率が高い。1993年度、松本市におけるカーネーションの出荷量は、スタンダード系が696万本、スプレー系が338万本で、計1,034万本であった。共選共販と個選共販の比は、スタンダード系で約2:8、スプレー系で約3:7であった。このような低い共選率の

原因は、カーネーション栽培農家の多くが、農協花弁部会設立以前に、農家個人で開拓した花弁卸売市場へ出荷を続けているからである。

例年的にカーネーションの平均単価はスプレー系の方がスタンダード系よりも高いが、1992年度はスプレー系の過剰生産のためスタンダード系の価格が高かった<sup>14)</sup>。スタンダードとスプレーのどちらの生産量を多くするかについての農家の投機的な考え方は興味深い。スタンダード系が高値になると見越して、スタンダード系を多く栽培するという農家もあれば、その逆をついてスプレーを多く栽培するという農家もあった。農家は価格や流行品種などについての情報を、農協よりも種苗会社や花弁市場から入手している。

1993年度のカーネーション以外の主な花弁の出荷は、アルストロメリアが56万本、トルコギキョウが66万本であった。出荷の最盛期はトルコギキョウが7～10月、アルストロメリアが3～5月である。アルストロメリアは宿根草で、条件さえそろえば一年中出荷可能である。新村では5戸の農家（図3：農家番号3, 7, 10, 11, 12）が、アルストロメリアやトルコギキョウを花弁温室団地で栽培しており、カーネーションの端境期に出荷している。

カーネーションの主な出荷先は、京浜方面（48%）、愛知県（36%）、関西方面（4%）、北陸・東北方面（2%）である。出荷方法はトラックが利用され、花弁市場、または共同荷受所へ直接出荷される。中央卸売市場など取扱量の多い市場へは直接出荷されるが、取扱量の少ない花弁市場へは産地からの荷を共同荷受所へ集荷して、そこからさらに市場ごとに荷分けをして出荷する。市場までの流通経路に共同荷受所が仲介するのは、青果物などの市場と比較して、花弁市場には小規模なものが数多く存在するためである。現在、花弁市場の統合が進んでいるが、ほとんどの花弁市場が中央卸売市場に統合されるまでは、共同荷受所は流通上大きな役割を果たすと考えられる<sup>15)</sup>。

#### IV 産地の発展過程

#### IV-1 模索期 (1950～1964年)

松本市のカーネーション栽培は、1950年に新村地区北新東集落の腰原重司氏によって始められた<sup>16)</sup>。腰原氏は第2次世界大戦前よりキクを栽培していた。カーネーション栽培導入の初期には、鉄砲ユリなども試験的に栽培していたが、松本市の気候にはカーネーションの方がより適していた。カーネーション栽培開始当初の品種には、乙女、コーラル、ピーター、シムなどがあった。また、木製支柱のビニルハウスを使用した施設栽培も行われていた。

カーネーション栽培農家が増加するにつれて、出荷組織を作る必要性が生じたことから、1961年に生産農家による南信ハウスカーネーション組合が設立された。出荷先はカーネーション生産農家が各々に開拓した様々な花卉市場であり、農家と花卉市場との間に個人的な強いつながりが形成され始めた時代でもあった。

この時期、東新集落と南新東集落では、農家の

世代交代などを契機として、酪農(図5:農家番号1, 4, 12)や水稲作(図5, 農家番号2, 5, 6)からキク栽培へ転換した農家があった<sup>17)</sup>。とくに、新村地区には規模の小さな酪農家がいくつかあったが、乳牛の更新、搾乳量の増加、経営の合理化をはかれなかった農家は酪農を放棄し、より換金性の高いキク栽培へと転換していった。

キク栽培農家の中でも、より先進的な農家は、カーネーションを導入した(図5:農家番号5, 6)。これらの農家はカーネーション導入時の年齢が23歳・27歳と若い農家で、当時、価格の低迷し始めたキクよりも換金性の高い花卉を模索していた。そのような中で、北新東集落の腰原氏が栽培していたカーネーションは、高冷地性の自然環境の下で良質なものが栽培可能であり、市場での評判も良好であった。そして、1957年には農家番号5が、1961年には農家番号6の農家が試作的にカーネーションを導入し、その後1, 2年で本格的な栽培を開始した。農家番号5の農家は、カーネーション栽培導入の初期には南信ハ

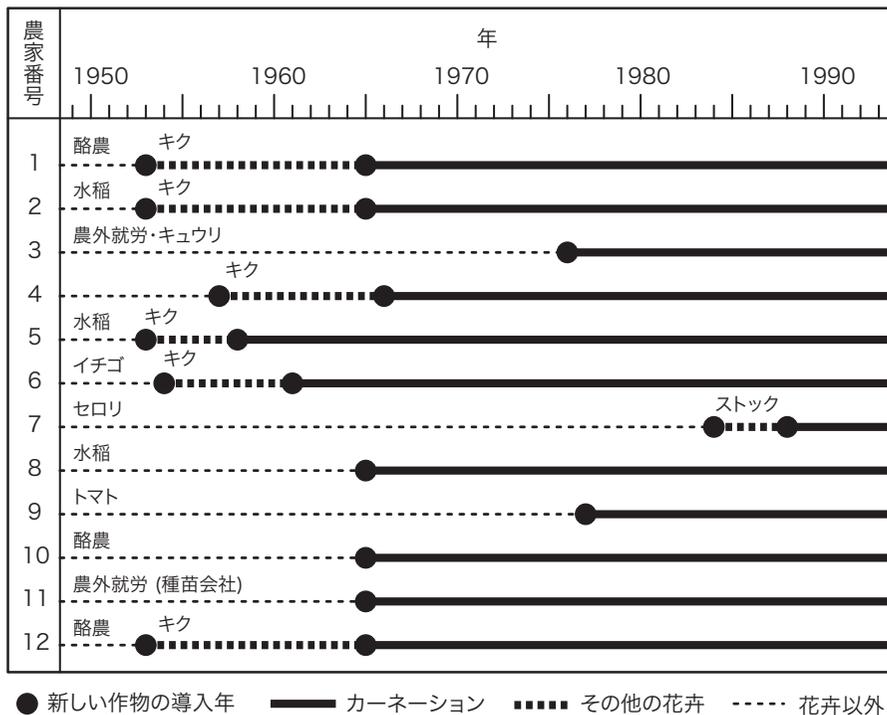


図5 新村地区における農家のカーネーション導入時期  
(聞き取りより作成)

ウス組合に加入していたが、組合との意見の食い違いなどの理由から加入後数年で組合を脱退している。農家番号6の農家は、キク栽培以前にはイチゴを栽培しており、集約的な農業の経験があった。この農家は、カーネーション栽培当初から現在まで、南信ハウス組合に加入している。

#### IV—2 拡大期（1965～1974年）

東新・南新東集落では、1965～1966年に7戸の農家が一斉にカーネーション栽培を導入し、カーネーション栽培農家は9戸になった（図5）。新しくカーネーションを導入した農家のうち、4戸（農家番号1, 2, 4, 12）はそれまでキク栽培を行っていた農家で、他産地との競合によるキク価格の低迷と、集落内における先覚者たちのカーネーション栽培の成功をふまえて転換に踏み切った。その他の3戸（農家番号8, 10, 11）は、酪農家、水稲作農家、農外就労から転換した農家であった。

新村地区にカーネーション栽培農家が増加するにともなって、カーネーション専用の出荷場が、生産者によって1965年に建設された<sup>18)</sup>。この出荷場では、当初から自動車を利用した個選共販出荷が行われた。その後、1960年代後半に農協花卉部会の前身である松本平農業協同組合園芸部会花卉協議会が設立されると、農協管理の下で出荷場が運営されるようになった。

農業試験場における栽培技術に関する研究成果も、カーネーション栽培の拡大・普及に重要であった。1950年代初期には、長野市の農業試験場や須坂市の園芸試験場が、標高800m前後の準高冷地で優れたカーネーションが栽培できることを報告していた。また、1960年代全般にかけて、カーネーションの栽培方法、土壌・肥料、病害などの研究がこれらの機関で精力的になされ、さらに1970年代初期には切花の貯蔵施設の研究も行われた。

栽培技術の発展とともに、安価な施設（パイプビニルハウス）の普及、新品種の導入、薬品の開発などによって、農家はより専門的なカーネー

ション栽培を行うようになった。木造ビニルハウスにかわって、パイプハウスが登場し始めたのは1960年代中期であった。新村地区では、低価格で設置の容易なパイプハウスの出現によって、それまで露地でキク栽培をしていた農家のすべては、カーネーションの施設栽培へと転換していった。さらに、施設栽培の普及にともなってカーネーションの品種も、より市場受けの良いシム系のスカニア（赤）などが主流になっていった<sup>19)</sup>。農業では、クロールピクリン、ドロールピクリンなどの病虫害予防用の土壌燻蒸剤が開発され、高い効果をあげていた。

カーネーション栽培農家数が増加し、カーネーションの産地化が進むと、政策面からの経済的・技術的な補助を誘引できるようになった。1973年に、稲作転換促進維持別対策事業により、カーネーションの共同育苗用の温室花卉モデル集団産地育成場が、島内地区と新村地区に建設された。これを契機として、1975年から花卉温室団地が新村地区に建設されていった。

#### V—3 成熟期（1975年以降）

1975年から1978年にかけて松本市が行った第2次農業構造改善事業によって、新村地区に3つの花卉温室団地が建設された。東新・南新東集落では、それぞれ1975年と1976年に花卉温室団地が建設され<sup>20)</sup>、それ以前からカーネーションを栽培していた農家9戸と、新たに栽培を始めた農家番号9の合計10戸の農家がそこでカーネーション栽培を始めた（図5）。農家番号9は、それまでトマトの施設栽培をしていたが、花卉温室団地の設立が大きな契機となってカーネーション栽培を始めるようになった。この時期には、さらに農家番号3番も農外就労から、カーネーション栽培へと転換している。

農協花卉部会が設立されたのは1978年であり、これは、松本市のカーネーション栽培農家の働きかけによって、松本平農業協同組合園芸部会花卉協議会が発展し、農協花卉部会として独立したものである。これでカーネーション栽培を含む

花卉栽培農家は、農協組織なかで以前よりも高い地位に位置づけられ、新しい花卉出荷場の建設(21)など、政策面からの補助を受けやすくなった。その後、松本市の周辺町村に新規のカーネーション栽培農家が増加すると、1981年にはカーネーションの共選共販の出荷が始まった。

しかし、農協花卉部会設立以前から南信ハウス組合でカーネーションを栽培していた農家は、花卉市場との個人的なつながりが強く、出荷はほとんどが個選共販である。1980年代後半からの全国的な傾向として、地方花卉卸売市場や規模未滿の花卉卸売市場が、中央卸売市場として統合されはじめている。中央卸売市場では、均質で大量の切花の安定した供給を望んでいるため、産地側ではそれに答えられるような出荷体制を整えることが望まれる。

東新・南新東集落では、1988年に農家番号7の農家がカーネーション栽培を導入している。この農家は、セロリ(22)を長年栽培していたが、1980年代前半からは花卉(ストック)の栽培面積を増やしはじめ、1988年にはカーネーション栽培を専業的に始めた。農協花卉部会設立後にカーネーション栽培を開始したこの農家は、南信ハウス組合には加入していないため、共選共販での出荷が多い。

近年の主流のカーネーションの品種には、スタンダード系の品種には、地中海系のフランセスコ(赤)、インフランセスコ(ピンク)、ピンクフランセスコ(ピンク)、シム系のノラ(ピンク)、ユーコン(白)などがあり、一方、1980年代中頃から急増したスプレー系の品種には、地中海系のバーバラ(ピンク)を始め、さらに多種多様なものがある。このように栽培品種を多種多様なものにしたのは、種苗会社からのカーネーション苗の購入である。苗の購入が増加し始めたのは1980年代中頃であり、現在ではカーネーション苗の9割以上は種苗会社から購入されている。また、アルストロメリアやトルコギキョウなど新しい花卉の導入や、直定などの新しい作型の導入にも種苗会社は大きな影響を与えた。今後、革新的

な品種や栽培技術は、種苗会社からもたらされる可能性が大きいと考えられる。

現在、花卉園芸部門の種苗会社の分布は広域的であり、苗の購入を通して種苗会社間、種苗会社と農協・農家など、種苗を介したインテグレーションがみられる。近年では日本国内での育種も盛んになりつつあるが、カーネーションの主要品種のpatentは、現在でも海外の種苗会社が持っていることが多い。主な種苗会社は、オランダ(コーイ、ヒルベルダ、スターベレン、ウエストステック)、イスラエル(シェミー、ブライヤー)、スペイン(バルブレ&ブラン)、イタリア(タロニー)、アメリカのカリフォルニア(フロリダプランツ)など世界中に及んでいる。農家は、日本の種苗会社(第一園芸、サカタ、タキイ、ミヨシ、フジプランツなど)や農協を通したり、または直接に海外の種苗会社から苗を購入したりしている。

## V 結論

経済の高度成長により、農外部門からの収入が急増した。その結果、農家の兼業化が著しく促進した。このような社会・経済的な環境の中で、農家が専業的に農業を続けていくためには、経営規模を拡大したり、より集約的な農業に転換する必要があった。松本市の農村部においては、一部の若い篤農家が、換金性の高い作物の栽培を目指して、労働・土地集約的なキク栽培を導入するに至った。

キク栽培の開始と同時に、全国の新産地の台頭によりキクの価格が低迷するようになり、松本市のキク栽培農家はキクに変わる作物を模索し始めるようになった。当時、先覚者が栽培していたカーネーションは、高冷地性という自然環境に適していたこともあり、キクの代替作物となった。施設栽培や、新しい農薬の使用などの栽培技術の進歩もあり、1960年代中頃に新村地区のカーネーション栽培農家が増加した。

大規模消費地から遠距離にある長野県では、地

域的な出荷組織（南信ハウス組合）を作り、組織的な出荷を開始した。出荷組合の設立や出荷市場の開拓は、農協ではなく生産農家が主体となった。生産農家自らが設立した出荷組合は、組織的に強固であり、松本市を本格的な輸送園芸地域へと発展させた。

1970年代には生産施設に対する政策の補助事業が行われた。1975年からの第2次農業構造改善事業による花卉温室団地の建設は、カーネーション栽培農家の数を増加させた。また、1978年には農協組織としての花卉部会が設立され、出

荷施設も充実し、1980年代に入ると共選共販体制もとられた。これらの政策的な補助は、松本市のカーネーション産地としての位置づけをより確固たるものにした。

近年では、種苗会社からの情報の重要性が高まっている。高冷地性の自然条件を生かした革新的な品種を導入することができれば、市場において「松本市のカーネーション」というネームバリューをさらに高めることができるようになると思われる。

#### 謝辞

現地調査では、JA松本ハイランドの小沢浩明氏、松本市役所農政部の長谷川雅倫氏、そして松本市新村地区の多くの農家の方々のお世話になりました。研究を進めるにあたっては、筑波大学地球科学系の奥野隆史教授、佐々木博教授、斎藤功教授をはじめとする諸先生方から助言をいただきました。以上、記して感謝を申し上げます。このファイルはオンライン化するために2000年に作成した。

#### 注

- 1) 作付面積と出荷量ともに施設栽培が99%以上を占めている。
- 2) 長野県経済事業農業協同組合連合会（1974、1976）では、標高1,000m以上を高冷地帯、1,000～600mを準高冷地帯、600m以下を平暖地とする。
- 3) 市内に3か所ある花卉温室団地のうち、新村地区以外に立地するのは、梓川村との境界付近（根石集落）の市西端の1か所である。
- 4) キクの場合と異なり、カーネーションのスプレー系とスタンダード系は品種が異なる。カーネーションの品種は種苗会社から苗を購入する時点で22程度の種類がある。
- 5) ここでは農家が実際に耕作を行っている面積を経営耕地面積とし、耕地の貸借関係は考慮しない。
- 6) 家主の農業従事日数が年間150日以上を農家とする。
- 7) 年間農業従事日数150日以上者がいない農家37戸のうち、家族が5人以上の農家とする。
- 8) 聞き取りによれば、和田地区では開墾地でのスイカやセロリなどの栽培が多い。
- 9) 農家基本台帳では雑穀類に分類されていたが、ここでは聞き取りにより水稻とする。
- 10) 開墾を行った詳しい年代や、開墾の規模などは不明である。
- 11) モノ日と呼ばれる。キクの場合には彼岸や盆、カーネーションの場合は母の日など。
- 12) 出荷日は日、火、木曜日である。これは市場でセリが行われるセリ日（月、水、金曜日）の前日である。
- 13) カーネーション以外の共選共販では、トルコギキョウが11時から11時30分まで、アルストロメリアとスターチスは12時までに出荷を完了しなければならない。
- 14) 1992年度のスタンダード系の一本あたりの平均単価は55円、スプレー系は50円であった。
- 15) 荷受会社は、輸送機関としての役目を持つだけで、市況などに関する情報には関与していない。
- 16) 市川（1990）は、松本市のカーネーション栽培の開始年を1948年としているが、ここでは筆者の聞き取り調査によって1950年とした。

- 17) 花卉栽培農家の中には、南安曇の農学校を卒業後にキク栽培を導入したものもいる。
- 18) 現在の花卉集出荷場から東へ約 1km の地点、国道 158 号線沿いの北新東地区につくられた。
- 19) その後カーネーションの主要品種は、1980 年代初期にタンガヘ、さらに 1980 年代中期にはフランススコへと変化していく。
- 20) 鉄骨ガラスハウス 26 棟で、総工費用は 2 億 7 千万円であり、そのうちの約半額が松本市などからの補助を受けた。
- 21) 松本ハイランド農業協同組合には、4 か所に花卉集出荷場（新村地区、島内地区、和田地区、波田町）があったが、それらは 1990 年に現在の新村地区の花集出荷場に統合された。
- 22) セロリは新村地区と隣接する和田地区で栽培が盛んであり、明治時代に栽培が始まった（長野県農政部園芸特産課、1980）。

#### 文献・資料

- 市川正夫 1991. カーネーションの生産卓越地の動向—長野県坂城・上山田町、富士見町、松本市、佐久町—。信濃 43：682-694.
- 伊藤貴啓 1989. 東三河平野におけるスプレー菊栽培地域の形成。地理学報告 69：13-32.
- 関東農政局長野統計情報事務所編 1993. 『長野県農林業市町村別統計書』174-181. 長野農林統計協会.
- 松井貞雄 1967. 渥美半島における温室園芸の地域形成と地域分化。地理学評論 40：409-425.
- 松井貞雄 1968. 伊豆川津谷における花卉園芸。人文地理 20：383-412.
- 松井貞雄 1978. 『日本の温室園芸地域』。大明堂.
- 松井貞雄 1986. 沖縄島における電照ギク栽培の特色。地理学報告 62：1-18.
- 長野県経済事業農業協同組合連合会 1974. 『長野県そ菜発展史』長野県経済事業農業協同組合連合会.
- 長野県経済事業農業協同組合連合会 1976. 『長野の花』長野県経済事業農業協同組合連合会.
- 長野県農政部園芸特産課 1980. 『長野県の園芸特産』長野県農政部園芸特産課.
- 農林水産省経済局統計情報部 1993. 『平成 3 年産花き生産出荷統計』31. 農林統計協会.
- 農林水産省経済局統計情報部 1994. 『平成 4 年花き流通統計調査報告書』239. 農林統計協会.



写真1 新村地区の花弁温室団地  
 (1994年6月30日撮影)  
 区画整備された水田の中に、鉄骨ガラスハウスの花弁温室団地が立地する。これは、第2次農業構造改善事業によって1975年に建設されたものである。



写真2 ビニルハウスのカーネーション栽培  
 (1994年6月30日撮影)  
 間口5.4m, 奥行40mのビニルハウスで、スプレー系のカーネーション(赤色)が栽培されている。右手前では、新種のカーネーション(白・桃色)を試作している。



写真3 個選共販の荷  
 (1994年6月30日撮影)  
 これは、名古屋市の花弁卸売市場へ出荷され、1994年7月1日金曜日のセリにかけられる切花である。南進ハウスカーネーション組合と書いてある箱には、1箱約80本のカーネーションが入っている。

# Development of Carnation Production in Matsumoto City

Takaaki Nihei

## **Abstract:**

Based on interviews with farms about the adoption of carnation and new farm management, the cause of the development of carnation production in Matsumoto City was examined in this paper. The carnation production in Matsumoto City started in the early 1950s. Thereafter, it was developed as one of the production centers in Nagano Prefecture from the late 1960s to the early 1970s through the establishment of cooperative shipment and the construction of greenhouse estates for floriculture. Recent carnation production farms sustain their farm management by intensifying the connections with agribusiness companies outside the city through the purchase of imported nurseries and new cultivars.

## **Chapters and Sections:**

- I Introduction
- II Carnation Production in Matsumoto City
  - II-1 Distribution of Carnation Farms
  - II-2 Land-use in Niimura District
- III The Bases of Production
  - III-1 Labor and Real Estates
  - III-2 Distribution of Arable-lands
  - III-3 Crop Calendar and Distribution
- IV Development of Carnation Production
  - IV-1 Groping (1950-1964)
  - IV-2 Expansion (1965-1974)
  - IV-3 Maturity (1975-)
- V Conclusion

## **Figures and Photographs**

- Figure 1: Distribution of carnation farms in Matsumoto City, 1994.
- Figure 2: Land use of Niimura district, 1994.
- Figure 3: Families and their arable land in Niimura district, 1994.
- Figure 4: Distribution of farm arable land in Niimura district, 1994.
- Figure 5: Introduction of carnation production in Niimura district.
- Photo 1: Greenhouse estates in Niimura district.
- Photo 2: Carnations in plastic greenhouse.
- Photo 3: Loads for individual shipment.

**Key words:** carnation production, middle altitude cool-climate region, Matsumoto City, Nagano Prefecture